

エマソンとアメリカ的詩人像

福田 京 一

ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803—1882) は、極めてアメリカ的な詩人像——預言者 (prophet) および祭司 (priest) としての詩人——の提唱者であった。彼は、過去の詩人像を整理、修正して、若い共和国アメリカの詩人像を新たに構築することによって、時代の文化的思想的社会的要請に応えうるアメリカ詩の出発を準備した。

この小論の目的は、エマソンの詩そのものは対象とせず、¹ I 彼が唱えた詩人像、II 民主主義国アメリカにおける詩人の役割、III 詩人像の伝統、を考察することにある。そして、結論として、IV エマソンの後継者ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) の詩論およ

び詩に受継がれている詩人像の軌跡を検証する。

I

同時代人エドガー・A・ポオ (Edgar Allan Poe, 1809—49) が、“The Poetic Principle” (1850) で、詩は「詩のためだけに」書かれるべきで、その目的は「真実」ではなく、「美」の創造である、² と力説したのに対して、エマソンが「詩人は、言う人 (sayer) であり、名付け人 (namer) であり、そして美を表現する」(W, III, 7)³ と述べたとき、彼が考えている詩人は極めてヘブライの預言者に近いことが明らかになる。詩人の第一条件は「理念を見る人 (a beholder of ideas)」であること、第二条件は「必然と原因を言語によって表現する人 (an utterer of the necessary and causal)」(ibid., 8) であること。詩の形式、韻律や押韻、用語に注意を奪われて、詩の美的側面にのみ関心を払うのは、「詩才の持主」ではあっても、「本当の詩人」(ibid., 9) ではない。「本当の詩人」は、極端な場合、いわゆる詩さえも書く必要はない。「詩をつくるのは、韻律ではなく、韻律を生み出すところの思想 (a metre-making argument) である」(ibid., 9)、と彼は考えるからである。この詩観は、ポオが「異端」であると決めつけ

1. エマソンの詩を再評価する先鞭となった Hyatt H. Waggoner, *American Poets from the Puritans to the Present* (Boston: Houghton Mifflin, Co., 1968) 以後の代表的研究を挙げておく。Carl Strach, “The Mind’s Voice: Emerson’s Poetic Styles,” *ESQ*, No. 60 (1970), 43—59; Harold Bloom, “The Central Man: Emerson, Whitman, Wallace Stevens” and “Bacchus and Merlin: The Dialectic of Romantic Poetry in America,” *The Ringers in the Tower* (Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1971); *The Anxiety of Influence* (New York: Oxford Univ. Press, 1973); *A Map of Misreading* (New York: Oxford Univ. Press, 1975); H. H. Waggoner, *Emerson as Poet* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1974); Sacvan Bercovitch, *The Puritan Origins of the American Self* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1975); David Levin, ed. *Emerson: Prophecy, Metamorphosis, and Influence* (New York and London: Columbia Univ. Press, 1975); David Porter, *Emerson and Literary Change* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1978); R. A. Yoder, *Emerson and the Orphic Poet in America* (Berkeley: Univ. of California Press, 1978); Louise Schleiner, “Emerson’s Orphic and Messianic Bard,” *ESQ*, No. 97 (1979), 191—202.

2. *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, ed. G. R. Thompson (New York: Literary Classics of the United States, Inc., 1984), pp. 75—76.
3. *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, ed. E. W. Emerson (Boston and New York: Houghton Mifflin, Co., 1903—04), IX, ix—x. 以下、エマソンのテキストへの言及はこの版に依り、Wと略す。なお、*The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, ed. W. H. Gilman et al. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1960—82) は JMNと略す。

たにも拘らず、詩の歴史全体のなかでみれば、正統に属している。詩作が、個人的営為とみなされ、職業として成立したのは19世紀になってからのことで、その歴史は非常に短いものである。⁴

「見る人」としての詩人の歴史は、ヨーロッパの歴史のなかに深く根を下している。「見る人」は「予見者 (seer)」でもある。「昔イスラエルでは、神のみこころを求めに行く人は、さあ、予見者のところへ行こう、と言った。今の予言者は、昔は予見者と呼ばれていたからである」(「サムエル記第一」第9章9節)。人間に神の言葉を伝える人である予言者 *nabi* (= prophet) は、目の前にないものを知る能力をもち、知ったものを人々に伝える。「まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、予言者たちに示さないでは、何事もなさない」(「アモス書」第3章7節)。

予言的著述の一般的特徴として、(1)予言は遠い未来についてなされるのではなく、現在の状況と密接な関係にあり、世の中の変化、改善を訴える、(2)予言は詩的である、(3)予言は不可解なことがらに係わる。⁵ これらの特徴は、エマソンの詩観にそのままあてはまる。すなわち、(1)詩はアメリカの状況と密接な関係をもち、その改革を訴える、(2)詩は予言的である、(3)詩は不可解なことがらに係わる。

(1)「新しい時代の経験は新しい告白を求めている。そして世の中はいつもその詩人を待っているようだ」(W, III, 10)。過去の偉大な詩人たちも、エマソンによれば、それぞれの時代が求めた予言者であったが、今や彼らはその使命を終えて、歴史のなかに消えてしまった。そして現在という新しい時代は「詩人の降臨 (the advent of the poet)」(ibid., 11) を待ち望ん

でいる。「まだ歌われていないが、しかし、われわれの見たところアメリカは一篇の詩なのである」(ibid., 38)。アメリカは詩である、ということはアメリカそれ自体が予言の内容そのものを表わす表象である、ということである。だからアメリカの意味を読みとり、それを言語表現する人が待たれている、というのである。

(2)詩が予言的であるのか、予言が詩的であるのかは堂々巡りの議論になろうが、両者は親密な関係にあった。「予言する (*nibba*)」という動詞はエルサレムの宮の歌い手集団の仕事と関係があり、その起源は宮殿での礼拝のとき告げられた詩的神託だろう。⁶ さらに初期キリスト教徒は、聖書を通して歴史を覗き、時の終りまで眺めた。そして歴史的出来事のなかに神意を示すような徴を求め、それを言葉にして語るとき、予言的文学が誕生したのである。「見て、歌う」つまり「予言して、詩を作る」という詩人=予言者の文学的伝統は、英詩に限ってみても、ラングランド (William Langland) からスペンサー (Edmund Spenser)、シェイクスピア (William Shakespeare)、ミルトン (John Milton)、グレイ (Thomas Gray)、ブレイク (William Blake)、ワーズワス (William Wordsworth)、コールリッジ (S. T. Coleridge)、シェリー (P. B. Shelley)、イェーツ (W. B. Yeats) を貫流している。⁷ そして、巨視的にみて、ピューリタン詩人からフレノー (Philip Freneau)、コネティカットの才人たち (the Connecticut Wits)、ブライアント (W. C. Bryant)、エマソン、ホイットマン、フロスト (Robert Frost, 1874—1963)、スティーブンス (Wallace Stevens, 1879—1955) と、この予言者的詩人像は英詩の傍流として大西洋の対岸へと流れでて、やがてそれ自体が大河に成長した。

(3)予言者はその言動によって時々聞き手の感覚と理性を混乱、困惑させ、日常的経験にてらして、不可思議で了解不能な世界を垣間見させ

4. William Charvat, *The Profession of Authorship in America, 1800-1870*, ed. M. J. Bruccoli (n. p.: Ohio State Univ. Press, 1968), p. 29.

5. Jan Wojcik, "Introduction," *Poetic Prophecy in Western Literature*, eds. Jan Wojcik and Raymond-Jean Frontain (London and Toronto: Associated Univ. Presses, 1984), P. 16.

6. "Prophecy in Hebrew Scripture," *Dictionary of History of Idea*, III, p. 659.

7. Wojcik, p. 21.

るが、それがその本来の使命である。混同、曖昧、暗示、類推がその修辞の常套である。他方、詩人は、言語の象徴的機能を利用して、読者の感覚を因習、伝統、常識的経験の範囲から外に連れ出して、宇宙の事物がすべて連続して統一を保っていることを知らしめる「解放の神々」(ibid., 32)である。エマソンをはじめ超越主義者は、時折「何を喋っているのかわからないし、我々が勇気づけられているのか、あるいは、脅かされているのかわからない不思議な言葉」を使うとからかわれたが、⁸それほど彼らの言語の比喩的用法は並外れて難解なこともあった。しかし、現状を改変するために、まず現状の思想体系をつくりあげている言語の象徴体系の慣習を破って語らねばならない。それなしには、新しいヴィジョンを与えることはできない、と彼らは考えた。

このように、エマソンが唱える詩人像は、預言者＝詩人としてその起源を旧約にまで溯ることができる。詩人は、とくにロマン派の詩人たちが個性と独創性を強調したおかげで、社会から孤立したり、社会に背を向けたりする姿勢がその本来の姿だと見なされたりするが、詩人を預言者＝詩人像の歴史のなかに置いて眺めてみると、彼らは決して時代の状況から遊離した幻想的詩人ばかりではない。「詩人は代表者である——全体的な人間、ダイヤモンド商人、象徴者、解放者である。世界は彼のなかに律法学者の手を投影し、そして十分に時代精神を書きこむのだ」(W, VIII, 71)。むしろ、時代が、とくに産業革命以来の時代が人間を孤立化させ、矮小化し、「部分的人間 (partial man)」にしてしまったので、詩人はその傾向に対して、「全体的な人間」になれ、と訴える任務があると考えたのである。「すると、私のもとに、セラフ

ィムのひとりが飛んで来たが、その手には祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった」(「イザヤ書」第6章6節)ので、詩人はそれを受取って、預言者の役割を引き受けたのである。

もう少し限定して言えば、エマソンの「本当の詩人」とは、個人の霊的体験の重要性と万人による聖書解釈の必要性を説いただけではなく、回心体験の記録として日記、自叙伝、瞑想詩などを奨励する美学を育てたプロテスタント神学の申し子であると言える。その個人的な著作作品は、後に述べるように、それ自身のなかに公的な要素、一種の社会性を含んでいたが、やがて新しい公的意識を生みだすのに役立った。この意味で、エマソンの文学観はプロテスタント、とりわけピューリタン神学が生みだした新しい宗教的文学の正統に位置づけられる。⁹

元来、ヘブライ的預言文学の傍系にしかすぎなかったアメリカ文学が、19世紀になって、エマソンの詩人観にみられるように、英国の同時代詩人——ワーズワス、コールリッジ、シェリー、キーツ、テニソン——に比べて、よりヘブライ的であるのは驚くべき事実であるが、その理由は、アメリカが新しいイスラエルとして選ばれたというピューリタンの選民思想と、次に述べるデモクラシーの意義を考慮に入れずには説明はつかないように思われる。

II

ピューリタン神学では、個人の霊的体験が回心体験として捉えられ、その体験を得るために人は心を準備しておかねばならない。教会も聖書も個人がその体験を通して再生するために存在する。芸術もまたその効用性のために容認されたに過ぎない。しかし、個人の再生が私的な体験でありながら、究極的には、それを通してのみ公的社会的な存在——神との契約関係にある新しいイスラエルの一員——になりうるという二重の契約関係のなかに個人はおかれている。同じように、芸術は個人的私的創造行為の結果

8. Nathaniel Hawthorne, "The Celestial Railroad," *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Univ. Press, 1974), X, p. 197. その他、ポオも短篇 "How to Write a Blackwood Article," "Never Bet the Devil Your Head" において超越主義者を風刺している。また、"The Literary Life of Thingum Bob, Esq" の 'Mr. Emmons' はエマソンへのあてこすりであろう。

9. Wojcik, pp. 22-23.

ではあるが、他の人々の間に公的な意識を育てたり、何が公の目的であるのかを知らせたり、またそれを忘れないように注意を喚起したりする手段であった。従って、主題は、ニューイングランドにおける植民の目的と意義とそれに参画している人間の知的感情的反応が中心で、呼び起される情緒は秘かな官能的美的快樂であってはならなかった。¹⁰

詩人はこのような社会の一員であるという自覚をもって、その時代の社会と政治の問題との係わりのなかで自分の見解を述べて、世の人々に正しい行動を起すように訴え、説いた。アメリカへの入植以後、ニューイングランドでは、荒野をカナンの地に見たてて、そこに神の国を建設するのに伴う諸々の問題や、時の経過とともに新たに起る問題に対して、詩人は本来あるべき社会の姿を説いて、人々に警告を発するのが務であった。詩人が社会に対する希望や警告や嘆きの声を詩を通して明確に表明した時期は、18世紀のはじめ、アメリカの独立革命期、1820年代から40年代、南北戦争の前後、第一次世界大戦後、そして第二次世界大戦後（1950年代）である。公的、社会的意識というとき、ある特定の政治問題に対する詩人の私的見解の表明ということの意味しているのではなく、ある社会的政治的問題に集約的に具象化して現われている国家的社会的大義の危機を声高に表明して、国民にアメリカの国是、理念について自覚を促すために行う詩的表現そのものが内含している意識のことである。

今話題にしようとするのはエマソンの時代である。彼がハーヴァードの神学部を卒業（1821年）した頃から死に至るまでの約60年間は、デモクラシーの理念と現実の間に起きた議論と政争と内戦と再建の騒々しい時期であった。この時期に彼はデモクラシーの問題をアメリカの文化の根幹に係わるものとして捉え、公的な意識を呼び起すために政治、社会、教育、芸術、思

想、宗教、科学など多岐に亘る問題に発言しつづけた。しかし、この時期の諸問題に対するエマソンの態度は、詩という観点からみなければ十分に理解できないように思われる。それは、詩がヘブライ的預言の伝統に則って、世俗的現実的問題に対するとき、私的見解の表明でありながら本来的に公的性質をもっている原初的表現形式であるからである。

ジャクソンのデモクラシーの時代といわれる1820年代から40年代は、1814年の対英戦争によって再燃したナショナリズム思想を背景に、政治的独立の次に来るべき国家のアイデンティティの問題、言い換えればアメリカ文化の質が問われた時期である。ジャクソン大統領の個人的資質によって象徴されるデモクラシーの概念は東部対西部および南部、資本家対労働者・農民、貴族主義的特権階級対コモン・マンという対立概念における後者の優位性に基いている。¹¹それは、ヨーロッパ的伝統に対してアメリカの土着性を文化のアイデンティティの中核におこうとするナショナリズムに支えられている概念であったが、この世俗的宗教とでもいべきデモクラシーが孕む問題はそれほど単純なものではないと考える人たちがいた。彼らは上述の対立概念の前者の方に属しているか、またはその影響力を強く意識していた人であった。彼らはアメリカ文化が一朝一夕に形成され洗練されるものではないと、旧大陸の文化遺産の偉大さを前にして思い悩み、そして議論を喚起した。

教養 (culture) は・・・エゴと宇宙の同一化に在る。だから、あるひとりが、「私は考える」、「私は希望する」、「私は見つける」と

10. Kenneth Murdock, *Literature and Theology in Colonial New England* (New York: Harper & Row, Publishers, 1963), pp. 50-52.

11. ジャクソン時代の政治思想を扱った代表的なものを挙げておく。Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Age of Jackson* (Boston: Little, Brown and Company, 1945); Richard Hofstadter, *American Political Tradition and the Men Who Made It* (New York: Random House, Inc., 1948); John W. Ward, *Andrew Jackson, Symbol for an Age* (New York: Oxford Univ. Press, 1955); Martin Meyers, *The Jacksonian Persuasion* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1957).

言うとき——彼は「人間が考える、希望する、そして見つける」と正しく言うかもしれないが——その人はすべての同胞の悟性と感情を支配している事実を述べているのだ。しかしそれでも同時に、ぶしつけにもならず、また彼らを混乱させることなく、その人は自分の「伝記的なエゴ」を——私は悪寒に悩まされた、私には財産があった、私の父は黒髪であった、等々——その人の公的なエゴにとまなう修辞や冗談や従僕として、絶えず見失なわれないことができるだろう (JMN, XI, 203)。

エマソンは、ジャクソン時代のデモクラシーの担い手であるコモン・マンがヨーロッパの影響下にあるアメリカ文化の地方性の限界を越えて、宇宙そのものと一体感を得ることによって一挙にアメリカ人を教養人に仕立てあげる方法を示した。エマソン自身は、牧師の家系に育ち古今の学問に接して、信仰と教養を統合する方法を超越主義哲学に結実させた。それでもって彼は一般大衆に、教養とは必ずしも彼自身が修めた古今東西の学問と芸術のことではなく、自己と超越的存在との同一化による魂の法悦状態のことである、と説いたのである。いわゆる教養を修得する余裕も制度も、ときには才能にも恵まれていないコモン・マンがヨーロッパの教養人に伍して遜色のない「高貴な人間」になる方法はそれ以外にないと考えた。歴史的にみれば、ロマン主義時代の神学である超越主義哲学は、19世紀前葉のアメリカという地方的時間的制約を打破し、時空の中核に流れている普遍的精神を、すべての人間は内在する「理性 (Reason)」によって認識し、そしてそれと同化することが可能であるとみなす。このことによって、歴史的な蓄積が不可欠の文化の問題を処理することができると考えて、彼はコモン・マンの教養人としての再生のために、1832年以降その仲介者たろうとすることに自己の使命を見出した。

1832年10月28日ボストン第二教会の牧師職辞

任は彼の生涯における最も重要な転換期であった。それはユニテリアン派の牧師として体制に奉仕する祭司から、より広い視野からアメリカを文化の問題として捉えねばならないと考えてアメリカの国家理念を世の人々に伝える預言者への変身であった。ただ単にジャクソン時代のコモン・マンを理想化して、現状を肯定するのではなく、物質的感覚的慰安を追求する権利の主張が平等主義の主旨であるかのように考えている風潮を批判して、個人の道徳的文化的再生を根幹とするアメリカ社会の形成を目指した。その前提として、個人の内なる神聖性への覚醒を説いたのである。 *Nature* (1836年) から *Essays, First Series* (1841年)、講演 *The Times* (1841—42年)、 *Essays, Second Series* (1844年)、 *Poems* (1846年) までの約10年間は、エマソン自身のなかにある祭司としての部分よりも、預言者としての部分が優勢になろうとする時期にあたる。

エマソンにおける祭司としての一面は、ジャクソンに代表されるアメリカと民衆への信頼となって現われている。

個人の力、自由、自然のもつもろもろの資源は、市民のひとりひとりの能力を緊張させる。私たちは、氷、虱、鼠、穿孔虫などをものともせず繁茂する樹木のようなたくましさで成長する。(中略) ギリシャの庶民 (デモス) のなかにある同じようなたくましさは、民主政治の弊害は事実よりも甚しいように思われるが、民主政治がよびさます精神と活力とは弊害を償って余りがある、と人をしていわしめるものがあつた。水夫、木こり、農夫、職人などの階級に属する人びとの粗野な手っ取り早い流儀には、それなりの長所があるものなのだ。力は主権者を教育する。私たちアメリカ人が、何かといえば英国の標準を引合いに出している限りは、自分たちの体の大きさを矮少にすることになる (W, VI, 61—62. 小泉一郎訳)。

アメリカはヨーロッパ文化の軛から離脱すべき時期に来ていると彼が考える理由は、アメリカがその歴史においてその時、大きな転換期にさしかかっていると信じていたからである。

歴史における偉大な瞬間とは、未開人が未開の域をまさに脱しようとして、なお毛深いペラスギ族の力を保ちながら、それを、いま開けようとしている、おのれの美意識のほうに転じたとき——ペリクレスやフィディアスが生まれたが、しかも、コリント風の都雅に移っていないという時期である。自然と世界におけるあらゆるよきものは、黒ずんだ液汁がなお豊かに自然から流れ出ているが、その収斂性や辛味が倫理や人情といったもので抜かれていない過渡期において見いだされるのである(*ibid.*, 70—71)。

粗野ではあるが、たくましい力に充ちたアメリカの民主制とそれを支えるコモン・マンのなかに、過去と未来、自然と文化、未開人と教養人が出会う場として崇高化されたアメリカの理念を見つけて、その理念に仕える祭司としてのエマソンの一面が伺われる。

しかし、過渡期を「偉大な瞬間」とみなすのは、それが教養、文明、未来に向っていると確信してのことである。この点で、理念に仕える祭司エマソンではなく、現実を憂う預言者エマソンは、アメリカの現状にいつも楽観してばかりはおれなかった。コモン・マンが教養人となって再生し、そしてそのなかから代表者としてヨーロッパの天才に負けない人物がやがて出現するだろうという期待は応えられそうにもなかった。デモクラシーの理念を文化的コンテキストのなかで彼なりに解釈して、ヨーロッパ文化の軛から脱する道を説く一方、その方法論の脆弱さをも感じていた。圧倒的な力を伴って押し寄せてくる産業主義と物質主義と、そして労働に消費される個人の莫大なエネルギーを前にして、現実には理念の恩寵を受けることなく、コモン・マンは the Masses として怪物のよう

のそ歩いているように思われた。¹²

現代を憂う預言者の側面は、1840年代においては、『日記』のなかに散見できる程度で、講演や出版物のなかに露わに表明されることはなかったが、やがて1850年代以降、それが公に聞かれることが多くなった。しかし、いつも彼のなかにあった祭司的部分と預言者的部分の曖昧な混在は、コモン・マンによるデモクラシーに対する彼のアンビヴァレントな態度を反映している。その原因は、まず第一に物質主義的な価値観にとらわれて、やがてアメリカが衆愚の国に変容していくのではないかという彼の懸念による。第二に、制度としての民主制を理想化することによって、理想と現実が混同されていると彼が判断していることによる。第三に、偉大なアメリカの時代精神を代表すべき偉人が実際に出現していないと彼が考えていることによる。第四に、講演者および批評家として預言者的役割を担っていると自覚しているエマソンの職業意識が強く働いて、理念の国からアメリカが遠ざかりつつある現状を嘆く彼の内なる声が大きくなったことによる。このように、現状を肯定する祭司から、現状変革の可能性を信じ、それを訴える預言者へ、さらにその可能性が消えつつあるのではないかと嘆く預言者へと彼は変わりはじめた。

この変化は、エマソンがいう「文化」の内実の変化でもある。ヨーロッパ的教養——それは結局のところ、*Representative Men* (1850) の6人の偉人によって代表されているが——を超克するための方法であったところの宇宙と魂の同一化という「教養」の定義から、古今東西の学芸に通じ、大衆から離れて貴族的孤高の精神を保持するという流儀に移っていくことでもあった。これは、多かれ少なかれ、民主主義時代の教養人が経験する皮肉な転向である。夢や希望の実現を近い未来に期待する青春から、それがいつまで待っても実現しないとき感じる挫折と悔恨の時期への推移である。

12. 拙稿「エマソンとデモクラシー」、『同志社アメリカ研究』別冊9 (1985), pp. 21-37 参照。

しかし、公的な意識に係わる預言者的批評家には絶望は許されていない。預言者としての「本当の詩人」の降臨の時まで、「ミューズの神からのことづてを技芸に係わる詩人に伝える」(W, III, 38) 使命を果し続けなければならない。一方、危機は、銀行資本の横暴、保守党の墮落と民主党の軽佻浮薄、フーリエ主義の流行、逃亡奴隷法、宗教界の硬直、個人の権利の濫用と無制限の拡大、ユニオンの分裂の危機と戦争という姿をして次々に現われたのである。その都度、預言者は明快に改革の方策を提示しなければならない。時には口ごもったり、不可解な象徴的言語を使わねばならないが、論理において曖昧であっては預言者の役割は果せない。人びとが富の追求に忙しく、忘れ去っている「共有の富 (common wealth)」のことを知らせねばならない。「すべての物言わぬ無生物のなかに目と舌を入れて」、アメリカが「一篇の詩」であることを歌う詩人が出現する道を準備しなければならない。なぜなら、詩人のみが、「一人の人間としての私的な力のほかに、どんな危険な目にあっても、心を開けて霊的な流れを自分の中に流入させ、巡回させることによって近づきうる公的な力が存在する」(ibid., 26) ことを正しく美しく告げることができるのである。歴史は、古代、中世、カルビン主義の時代を経て、現在、「野蛮と物質主義 (barbarism and materialism)」の時代になったが、歴史を貫ぬいて流れている普遍的価値を知っている「天才はまだアメリカにはいない」(ibid., 37)。だから、批評家エマソンが、国民の代表となってミューズの神と詩人の間を取りもつ仲介者にならねばならないと考えた。

このように、民主主義時代における詩人は、エマソンによれば、彼自身が時代に対して引受けた役割——祭司的、預言者的役割を詩を通して果すことが期待されていた。

III

詩人が預言者的であるのは、広い意味においてヨーロッパ文学のひとつの伝統である。この

伝統が時代を越えて生きつづけてきたのは、それぞれの時代に個有の社会的公的問題があって、それに対してとる詩人の特別の意識のせいである。ではアメリカの詩においてこの伝統はどのように継承されてきたのか。グレイやブレイクやシェリーの預言者=詩人像とエマソンがいうところのそれとの相違は何か。¹³ アメリカのロマン派詩人を英詩の一傍流として位置づけられないのはなぜか。たとえば、詩人を預言者として捉えるシェリーとエマソンを比べてみると、両者の詩人像における相違はほとんど見当たらないが、しかし具体的に詩人が相手にする社会的状況の相違は決定的であるように思われる。すなわち、17世紀のピューリタン革命と王制復古を除いて国家全体を根底から揺がせる政変が起らなかった社会における英国詩人と、植民地時代から独立革命期へ、さらに共和制から民主制への移行、また南北戦争などの内乱を経験した国の詩人との間にみられる社会への具体的な係わり方の相違である。英国の預言者的詩人が共和制を夢想しながら、多かれ少なかれ社会より孤立を強いられたのに対して、¹⁴ アメリカの詩人は、ヘブライ的伝統を当初から継承することとなった。その歴史を振り返ってみよう。

預言的性格を反映している17世紀から19世紀までのアメリカ詩には、次の四つの特徴がみられる。(1)効用として文学を捉えること、(2)文学で重要なことは形式や技巧ではなく、思想であること、(3)選ばれた国アメリカを崇高化するが、危機的状況においては警告や嘆きの声を反映すること、(4)個人的要素の強い詩においては、私的なエゴは公的なエゴへ昇華されること。

17世紀のピューリタンの私的な文学——ここ

13. たとえば、グレイの“The Bard,” ブレイクの“America a Prophecy,” シェリーの“Ode to the West Wind”とエマソンの“Merlin”における詩人像を参照。またシェリーの“A Defence of Poetry”とエマソンの“The Poet”における預言者としての詩人像の共通性を思い出されたい。

14. 「預言者の仲間として、これらの詩人（英国ロマン派詩人たち）には国がなかった。」(S. Berco-vitch, “Emerson the Prophet,” *Emerson: Prophecy, Metamorphosis, and Influence*, p. 14.

では主として瞑想詩とエレジー——は信仰生活、なかでも回心に至る備え (preparation) の手段として効用があると見なされた。個人的な楽しみや慰安のために書かれることは殆んどなく、詩作の動機は明らかであった。詩は、選ばれた民の一員に相応しい人間になるための手段であると意識されることによって、社会的公的意識に与ることになる。叙事詩、歴史的著述、説教などの公的な文学との相違は、対象となる読者ないし聴衆の性格から生じる相違である。公的文学が、読者に直接的に預言的内容を訴えるのに対して、瞑想詩に代表される私的文学は、内なるもうひとりの自己に語りかける。つまり、再生以前の自己が霊的体験を経て、再生したエゴ——エマソン流に言えば、「公のエゴ」——に変身するための補助となる文学である。また、肉親の死や尊敬する人の死を悼むエレジーもピューリタンたちに愛好されたジャンルであったが、そこに表現されている悲しみの情緒がどれほど強いものであろうと、死を永生への過程として受け入れることによって、私的な体験を普遍的な真理のうちに組み入れる構造をもっている。

ここで、アン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet, c1612—72) の私的な詩——瞑想詩やエレジーや季節と風土を詠んだ詩——にみられる抒情的要素を預言的文学としての詩との関係で整理しておきたい。彼女は元来「折衷的作家」¹⁵ であって、主題も技巧もジャンルも多様である。17世紀の英米で流行した瞑想詩、エンブレム文学の影響を濃厚に留めた詩、エレジー、また英国とニューイングランドに関する政治的な詩、聖句の詩訳など、そのすべては当時の文学的コンベンションに従っていた。英国において彼女は父親の指導の下に、当時の女性としては例外的だと言えるほど典型的なルネッサンス人としての教養を修めたことを考えると、彼女が文化果つる荒野で、詩人になることを望んだ

ことがそれほど風変わりな望みであったとは思われない。従って、新大陸での彼女の外的内的経験が、当時の文学上のコンベンションを通して表現されたということを経験に入れれば、彼女のいくらかの詩のなかに見出される抒情性が、彼女の多くの公的な詩、すなわち社会的、政治的、宗教的、道徳的テーマを扱った詩のもっている預言者の性格と対立する極めて私的個人的な詩であると見なすこともないであろう。

“To My Dear and Loving Husband”のような「形而上学派」的愛の詩や“The Four Seasons of the Year”にみられる自然描写、“The Flesh and the Spirit”の肉体と魂の対話、孫娘エリザベスへのエレジーにみられる神への疑いなど、一女性としての感情の発露や宗教的懐疑や内的葛藤などに現われている抒情的要素は、彼女の詩を単なる教訓的な詩以上のものにさせているのは事実である。しかし、神の絶対性への疑念は、英米のピューリタンたち、たとえばジョン・バンヤン (John Bunyan) やトマス・シェパード (Thomas Shepard) にもみられる内的経験であり、¹⁶ また官能的とまで言えるほどの愛の表現でさえ、エドワード・テイラー (Edward Taylor, c1642—1729) の“Preparatory Meditations”における官能的表現と同じく、ニューイングランドの美学でもあった。¹⁷ さらに、彼女の自然描写は、一読してロマン派詩人のそれと同質のものではないかと思わせるときでさえ、クォールズ (Francis Quarles) のように、自然は神の世界を映し出しているエンブレム (emblem) として捉えられている。

彼女の公的な詩は言うまでもないが、私的な

15. Ann Stanford, “Anne Bradstreet,” *Major Writers of Early American Literature*, ed. Everett Emerson (Madison: The Univ. of Wisconsin Press, 1972), p. 57.

16. *Ibid.*, 48; Robert D. Richardson, Jr., “The Puritan poetry of Anne Bradstreet,” *The American Puritan Imagination*, ed. S. Bercovitch (London: Cambridge Univ. Press, 1974), 108.

17. Norman S. Grabo, “The veiled vision: the role of aesthetics in early American intellectual history,” *The American Puritan Imagination*, pp. 30–32; Robert Daly, *God’s Altar: The World and the Flesh in Puritan Poetry* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1978), pp. 26–28.

詩でさえ、「効用としての文学」の考え方から逸脱している訳ではない。人の注意を神から逸らせ、この世のむなしい物事に向けさせる激しい恋愛の情にとらわれすぎてはならないというピューリタンの芸術観は、感情面における公私のけじめの教義として、彼らにとっては自明の真理であった。だから、この教義と実際の詩に表現されている感情表現は矛盾していることはなかった。彼女の抒情的な詩は、当時の日記と同じように、作者が自己の内的外的生活や出来事をふり返り、自らの生きるべき道を見つめ、自己を公的なものとの関係で律していこうとする態度の現われであると同時に、公的社会的にも許容される方法によって自分の私的内的情緒的経験を表出したい衝動を充足させる、そういうものであった。

従って、のちの詩人フレノーやブライアントの抒情詩がそうであったように、そこに表現されている自然観や自然の感情は、その時代の感受性や思想として共有になりつつあるものや、既になっているものであった。このような意味で、ピューリタン文学にみられる公的文学と私的文学のふたつの側面は、その後のアメリカ詩の歴史における二極化の源であるという観点は、¹⁸ 事実を誇張した見解である。詩について言えば、叙事詩と抒情詩は、それぞれ公的な詩と私的な詩に厳密に峻別されるべきものというよりも、特にピューリタン詩においては、むしろ両者の親密な関係に注目すべきである。彼女の最良の詩であり、そして抒情的要素を含む“Contemplations”は、名誉と富と安心とを地上に求めず、天上に求めよ、と説き、全体を次のような預言でしめくくっている。

O Time the fatal wrack of mortal things,
That draws oblivions curtains over kings,
Their sumptuous monuments, men know
them not,

18. Agnieszka Salska, “Puritan Poetry: Its Public and Private Strain,” *Early American Literature*, XIX (1984), 119.

Their names without a Record are forgot,
Their parts, their ports, their pomp's
all laid in th' dust
Nor wit nor gold, nor buildings scape
times rust;
But he whose name is grav'd in the
white stone
Shall last and shine when all of these
are gone.¹⁹

17世紀のアメリカ詩を集めた唯一の詞華集である H. T. メサロール編 *Seventeenth-Century American Poetry* に所収の51人の詩人のうち、少なくとも19名は牧師ないし教会関係者であることをみても、はじめの約100年間のアメリカ詩は、瞑想、内省、ニューイングランドの宗教的歴史的意義、著名人の死などを主題とするものと聖書の翻訳が中心で、それぞれ預言的文学の特徴を備えている。ボストン教会の教師であったジョン・コットン (John Cotton, 1584—1652) は、*The Bay Psalm Book* (1640)の序文に次のように書いている。

それ故、詩が常にいくばくかの人びとに望まれ、また期待されているほどの流麗さと優雅さをもたずとも、神の祭壇に洗練の要はなし(「出エジプト記」第20章)、と彼らには考えて頂こう。何故なら、我等は甘美なる言い替えて詩を典雅にするよりも、むしろ平明な翻訳を尊んできたからである。だからして、「優雅」よりもむしろ「正義の観念」に、「詩」よりもむしろ「忠実」に仕えてきたからである。²⁰

ダビデの歌を拙い英語で翻訳しても冒瀆にはな

19. Harrison T. Meserole, ed. *Seventeenth-Century American Poetry* (Garden City, N. Y.: Doubleday & Company, Inc., 1968), p. 18.

20. *The Puritans, II.* eds. Perry Miller and T. H. Johnson (New York: Harper & Row, Publishers, 1938), p. 672.

らないことへの弁明であるが、その理由として彼があげているのは、詩に期待されているのは「詩」ではない、ということである。詩人の役割は、原典の正しい翻訳、つまり見えざるもの、聖なるものを人びとに理解しやすい言葉で伝える預言者のそれである、と言っているのと同じである。²¹ ただし、コットンは、技巧 (art) を断罪している訳ではない。「むしろ」という語に注意すべきである。

技巧に関して、コネティカットの牧師ジョン・バルクリ (John Bulkely, 1679—1731) は、ロジャー・ウォルコット (Roger Wolcott, 1679—1767) の *Poetical Meditations* (1725) への序文のなかで、「優れた詩人」が「偉人」でもありうることはめったにないが、例外的に存在しうると言って、その実例をウォルコットに見出している。²² 同様に、コットン・マザー (Cotton Mather, 1663—1728) も——彼はまたウォルコットと同じく、「詩篇」の英訳でも知られているが——「調味料」としての詩に一所懸命になって、「敬神」のための「糧」としての詩を忘れないように警告している。²³ これらの人びとによる詩論は、効用性において詩を評価するピューリタンの文学観を代表しているが、彼らが聖句や詩篇の翻訳者でもあったことを考えると、聖書の翻訳こそが最も「詩人」に相応しい仕事であったことが理解できる。

翻訳にあらわれたピューリタン文学の預言的性格は、もうひとつの極めてヘブライ的な文学形式に顕著にみられる。それは、マイケル・ウィグルズワース (Michael Wigglesworth, 1631—1705) の “God’s Controversy with New-England” とベンジャミン・トンプソン (Benjamin Tompson, 1642—1714) の “New-Englands Crisis” にみられる「エレミアの哀歌 (Jeremiad)」の主題と調子である。

Beware, O sinful Land, beware;

And do not think it strange
That sorer judgements are at hand,
Unless thou quickly change.²⁴

契約を忘れ、世俗に執着し、官能的慰藉に大義を忘れて人びとに警告を発し、悔改めのないまま最後の審判を迎えることの恐怖を説く。このステレオタイプ化された文学形式は、説教において最も多く利用されたが、詩においても効用性を発揮した。²⁵

ピューリタン文学にみられる預言文学の特質は、18世紀のいわゆる理性と革命の時代にも、変動する社会の状況に従って、変わりつつ受継がれていった。ティモシー・ドワイト (Timothy Dwight, 1752—1817) は、ニューイングランドの正統性をタイポロジカルな視点から叙事詩 “The Conquest of Canaan” (1785) や風刺詩 “The Triumph of Infidelity” (1788) において訴えた。同じくフレノーは、理神論的立場に立って、学友ブラケンリッジ (Hugh H. Brackenridge) との共作 “The Rising Glory of America” (1771) や英国に対する風刺詩 “General Gage’s Soliloquy” (1775) によって、アメリカの政治的立場の正統性を訴えて、人民の愛国心を昂揚させ、アメリカの崇高化、神聖化のために詩という公的表現手段を利用した。もちろん、風刺の精神は、元来預言文学の特徴のひとつでもあった。²⁶

独立革命期の詩は、宗教的正統性の主張や説得や警告の手段という枠から解放されて、はっきりと独立国家としてのアメリカの共和制の理念の神聖化を、預言者＝詩人の立場から捉えはじめた。革命期を、選ばれた国家としてその歴史的使命を真に問われている時だと確認し、フランスと英国より受ける受難を試練として受け止めて、国民の愛国心に訴えた。この時期に、ニューイングランドのプロテスタントの選民思

24. Meserole, p. 53.

25. David Minter, “The Puritan jeremiad as a literary form,” *The American Puritan Imagination*, pp. 24–25.

26. Wojcik, pp. 24–25.

21. cf. Murdock, pp. 9–10.

22. *The Puritans, II*, pp. 681–684.

23. *Ibid.*, p. 686.

想は拡大された空間において、千年王国思想 (Millennialism) と相俟って、デノミネーション間の競合や論争を経てのち、アメリカの国家理念である共和制の原理という教義に基づく「市民宗教」の萌芽を促すことになった。²⁷ このような状況の下で、多くの公的な特質をもつ詩——叙事詩、風刺詩、モック・ヒロイック (mock-heroic)、寓意詩が書かれたが、²⁸ それらは核心において預言的文学であった。

19世紀のはじめは、当然のごとく政治的独立後のアメリカ詩はいかにあるべきか、ということがヨーロッパとの関係で問われた。ブライアントは、ワーズワスのように、詩人は人生の教師でなければならない、と言っただけではない。「思うに詩のすべての素材は我国に存在している・・・現状の下で我国の詩がヨーロッパの詩に究極において劣るものならば、天才が宝の山のなかにあって怠惰にあぐらを組んでいるからであろう」²⁹ と講演で述べた。独立は国家意識をいやが上にも昂揚させ、ニューイングランドの地方主義を越えて、国家の普遍的原理を基にした文化の育成が知識人の肝要で緊急な課題となった。詩人には、選ばれた国の「代表者」として、何が目指すべき理念であり、何が現実には欠如しているかを国民に知らせる役割が期待

されていた。³⁰ その時、詩人は、必要に応じて随時預言を伝えるだけでなく、祭司として理念の洗礼の儀式を行なう役も引受けねばならないと考えた。これが、エマソンがいうところの「詩人＝祭司 (poet-priest)」(W, IV, 219) である。³¹

預言者と祭司の役割は、前述した通り、詩人がその時社会に対してとる態度の比重の置き方によって、ひとりの詩人のなかで入れ代わる。エマソン自身は、祭司＝預言者＝詩人となりえなかったが、そのような詩人の出現を預言する批評家であった。批評家エマソンにとって、「本当の詩人」が降臨する時は理念が具現化する時でもある。預言者＝詩人の側からみれば、創造主の言葉を人びとに伝える行為は、個人の側からみれば、私的なエゴから公的なエゴに変身して、自己が宇宙と一体となって、「私」が「人類」と同一化する道筋と重なり合うのである。韻律などの技巧を意味する art ではなく、詩人の art は「創造者が自分の作品にたどりつく道」のことであるので、この道筋である art すなわち預言によって、人は「私」を越えて理念の国にたどり着くことになる。その時が、政治的社会的制度としてのデモクラシーの国アメリカが理念の国に変貌する時である、というのがエマソンの国家観である。

アメリカが国家形成期を経て、ようやく青年

27. 独立革命期における政治思想、千年王国説、啓蒙主義、キリスト教の相互影響を論じたものを挙げておく。Sidney E. Mead, *The Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America* (New York: Harper & Row, 1963); Henry F. May, *Enlightenment in America* (New York: Oxford Univ. Press, 1976); Catharine L. Albanese, *Sons of the Fathers: The Civil Religion of the American Revolution* (Philadelphia: Temple Univ. Press, 1976); James W. Davidson, *The Logic of Millennial Thought: Eighteenth-Century New England* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1977); Nathan O. Hatch, *The Sacred Cause of Liberty: Republican Thought and Millennium in Revolutionary New England* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1977)

28. Charvat, pp. 11-12.

29. W. C. Bryant, *Prose Writings of William Cullen Bryant, II*, ed. Parke Godwin (New York: Russell & Russell, Inc., 1884), pp. 34-35.

30. 「文学は時代と国家の声である・・・偉大な精神の持主は時代の器官である。彼らは自分の言葉を語るのでもなく、自分の思想を考えだすのでもなく、昔の預言者の熱情のような衝動に動かされて、社会が鼓舞する感情を感じとり、それを表現するのだ。彼らは創造するのではなく、時代精神、最高の天上から降りてきた静かな美しい精神に仕えているのだ」(Edward Everett)。「我々は明瞭で、力強い調子で国民に語る詩を求めている。我が祖国を一層強く愛する気持ちにさせる詩を求めている・・・我が憲法の抽象的観念に形と生命を与え・・・熱情を正しい方向に導いてくれる詩を求めているのだ」(Edwin P. Whipple)。(Rufus W. Griswold, ed. *Prose Writers of America* [Philadelphia: A Hart, Late Carey & Hart, 1852], pp. 340, 552)

31. 他に, "The saint and poet" (W, VI, 157), "priest and poet" (W, X, 64) という表現もみられる。

期に達しようとした時期に、国家の理念であるデモクラシーが、単に制度としてのみデモクラシーを捉える人びとや党派によって、誤解され、曲解されたりして、その本当の意義が見過されている現状を見据えて、問題解決の方法を新しい詩人像の提出という形で試みたのがエマソンであった。19世紀前半は、アメリカ文化とは何か、またどのようであらねばならないのか、についての模索の時期であった。その時期に、私的、公的問題を個人の内部において理論づけ、次に個人と国家社会との関係を理論づけた批評家として登場したエマソンの帰結が、預言文学の伝統に則った祭司＝預言者＝詩人像の提唱であった。

IV

「地上のどの時代の国民よりもアメリカ国民はおそらく最も豊かな詩的性質に恵まれている。合衆国自体が本質的に最も偉大な詩なのである。」ホイットマンはエマソンと同じく、神の創造物としてのアメリカを聖化し、そしてそれを歌うことが詩人の仕事だと考えた。「最も偉大な詩人は・・・予見者 (seer) であり・・・個人であり・・・彼自身において完全である。」この予見者としての詩人像は、正しくエマソンの詩人像——祭司的、預言者的詩人像と完全に一致している。

まもなく祭司たちは姿を消すだろう。彼らの仕事は済んだのだ。(中略) より優れた人間が彼らと交代するのだ…預言者の一団が彼らと交代するのだ。新しい秩序ができて、彼ら(預言者)が人間の祭司となり、そしてやがてすべての人間が自分自身に仕える祭司となるのだ。(中略) 自分たちの神聖性によって、預言者と新しい詩人は、男性と女性、そしてあらゆる出来事と物事を解釈する人となるのだ。³²

ホイットマンは、デモクラシーの時代における詩人の役割を *Leaves of Grass* の序文(1855)で上のように述べた。彼は、エマソンと違って、詩の形式の改革に無関心ではなく、伝統的な韻律や形式を大胆に破壊して自由詩 (free verse) への道を拓いた。しかし、自分の詩集について「これに触れるものは、人間に触れるのだ」(“So Long”) と厳粛に宣言しているように、「韻律を生みだす思想」の方を重視していた。また、*Democratic Vista* (1867) では、エマソンと同じく、国民のひとりひとりが教養を高めることがデモクラシーの理念を現実化するには不可欠であるといい、そのために国民文学が必要だと説いた。このように、批評家ホイットマンは、時局に則して、エマソンの考え方を繰り返えしたのであった。

しかしながら、ホイットマンは、エマソンの批評家として留ったのではない。彼は祭司＝預言者としての詩人であった。

I celebrate myself, and sing myself,
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good
belongs to you.

.....

Failing to fetch me at first keep encouraged,
Missing me one place search another,
I stop somewhere waiting for you.

この詩行は、“Song of Myself” の冒頭の3行と最後の3行である。52節からなるこの長詩は「自己」の崇高化から始まり、次に私的なエゴ(エマソン流に言えば、「伝記的なエゴ」)がさまざまな経験を劇的に重ねたあと、最後にすべての人間によって追い求められる「私」(エマソンの「公のエゴ」)へと昇華される「自己」の歌である。彼の詩は、このようにホイットマンという一個人の内的外的体験を語ることによって、読者にも詩人と同じ「巡礼者の道」を辿らせて、究極的には詩人のヴィジョンを共有さ

32. Walt Whitman, *Leaves of Grass and Selected Prose*, ed. Sculley Bradley (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1967), pp. 470-471.

せて、人間がお互に共感し合い、理解し合えることを示すものである。言い換えると、読者の文学体験が、デモクラシーという宗教の回心体験そのものとなるのである。*Leaves of Grass*の第2版が出版された1856年以降、エマソンがホイットマンのなかにある種の異和感をもちはじめたにせよ、³³ 彼によって、「詩人の降臨」が実現したのであった。

そして、ホイットマン以後の詩人は、もはや楽観を許さない社会状況を迎えたとき、ホイットマンと同じ方法で、同じ修辞でもって語るこ

とはできなくなった。しかし、彼らが詩人として出発するとき、詩人ホイットマン像は確固としたものとして彼らの心のなかに場所を占め、彼らの姿を写す鏡のようなものとなった。³⁴ たとえば、ロバート・フロストやウォレス・ステイブンスにおける祭司＝預言者的側面を、エマソンが説き、ホイットマンが具現化したアメリカ的詩人像の観点から眺めることが可能ではないかと考える。しかし、それには稿を改めねばならない。

33. 1856年版でエマソンへの感謝の手紙を掲載して以来、彼に対するエマソンの賛辞は条件付きだった。“a nondescript monster” (Letter of 6 May, 1856 to Carlyle); “with marked eccentricities” (Letter of Jan. 10, 1863 to W. H. Seward)

34. Roy H. Pearce, *The Continuity of American Poetry* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1961), p. 57.